研究の成果

ウメ新品種「加賀地蔵」と「八郎」について

はじめに

昭和59年から農林水産省果樹試験場育成品種として各県で試験的に栽培されていたウメの「筑波６号」と「筑波２号」が、それぞれ「加賀地蔵」、「八郎」と命名され、近く種苗登録の予定である（平成９年10月現在）。暖地園芸センターでは、平成元年から特性調査を行ってきた。ここでは、これらの果実品種と梅干しへの加工適性を中心に紹介する。

「加賀地蔵」の特性

「加賀地蔵」は「白加賀」と「地蔵梅」の交雑品種で、果実重が35.2gと大玉系統である（図１）。樹勢は、中庸で結果枝の数は少ない。収穫時期は「南高」に比べて１週間程度早いが「古城」に比べてわずかに遅い。ほとんどの果実は、熟期になっても紅く着色しないが、日焼けが出る場合がある。また、ヤニ果の発生はほとんどみられない（表１）。

白干し梅にした場合、大果で果肉が軟らかく、果肉歩合も高い等品質が良好であった。しかし、果皮が薄く破れやすいため、果実の取り扱いに注意が必要であった（表２、図３）。

梅酒やジュースへの加工適性は、「南高」と同程度であった。

「八郎」の特性

「八郎」は「地蔵梅」の自然交配実生で、自家結実性があり、受粉条件が良くない地域でも結実する。開花期にネット掛けして訪花昆虫が受粉できないようにしたが、花数の約１割が着果した。樹勢は中庸で結果枝の数は比較的多い。果実の大きさは17.2gと小果である（表１、図２）。白干し梅にすると果皮が厚く硬くなるため、梅干しには適さないと思われた。また、しこり果の発生率も13.5％と高かった（表２、図３）。

おわりに

本県でのウメの栽培品種は、６割以上が「南高」で占められている。「南高」は収量、果実品質、加工適性に優れているため、当分これに取って代わる品種は無いのが現状である。しかし、早生の「古城」あるいは受粉樹の「小粒南高」や小梅については今後品種の更新がおこると思われる。

「加賀地蔵」は、「古城」と比較してヤニ果が少なく大玉果生産できる点で優れており、加工性も遜色無いので普及の可能性がある。

「八郎」は果実が小さいため、本県での普及は難しいと思われる。

（ウメ対策チーム　岩本和也）

表１　品種の特性

系統	樹勢	短果枝の着生	１樹当たりの収量（Kg） H8[a]	H7[b]	H6[c]	収穫時期	果実重(g)	果肉歩合	ヤニ果の発生
加賀地蔵	中	小	57.4	25.4	15.6	６月上中旬	35.2	91.2％	微
八郎	中	ヤヤ多	26.7	26.2	18.8	６月中旬	17.2	89.5	中
南高	中	多	44.3	44.3	36.4	６月中下旬	26.9	90.7	中

注）[a]９年生、[b]８年生、[c]７年生、その他の調査項目は平成８年調査、

表２　白干し梅の品質（平成７年調査）

系統	階級	果皮 硬さ	厚さ	しわ 数	しわ 太さ	破れ易さ	色	果実重(g)	果肉歩合	屈折計(Brix)	しこり果
加賀地蔵	２L	軟	薄い	少	細い	易	淡紅	14.5	82.8％	35.0	2.0％
	３L	軟	薄い	少	細い	易	淡紅	15.3	83.9	33.0	
八郎	S	硬	厚い	少	太い	難	白紅	6.9	82.2	34.0	13.5
	M	ヤヤ硬	厚い	少	太い	難	白紅	8.7	84.4	33.0	
南高	S	ヤヤ軟	薄い	中	中	中	淡紅 着色部紅	8.0	78.6	34.5	
	M	ヤヤ軟	薄い	中	中	中		8.7	79.9	33.5	12.0
	L	ヤヤ軟	薄い	中	細い	難		12.4	83.8	32.5	
	２L	軟	薄い	少	細い	難		13.5	85.0	35.5	
	３L	軟	薄い	少	細い	難		19.9	84.4	31.0	

注）　加工方法：完熟のウメ10Kgに原塩２Kgを加え、約40日後３日間天日で乾燥

図１　加賀地蔵の果実

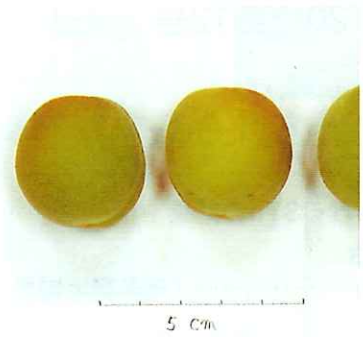

図２　八郎の果実

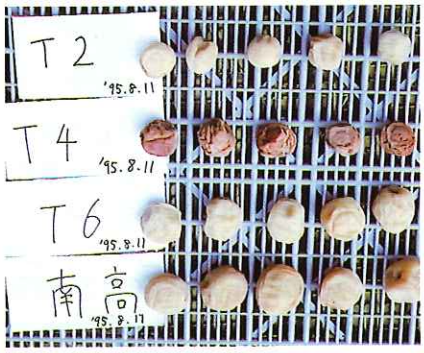

図３　白干し梅
（T２は八郎、T６は加賀地蔵）